

本州中部の亜高山帯針葉樹林に生活するヒメハナカミキリ属 4種 *Pidonia* の分布形成について

窪木 幹夫

〒156-0041 東京都世田谷区大原 1-47-15

Consideration on the distribution of four species of the genus *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae)
species inhabiting the subalpine conifer forests in central Honshu, Japan

Mikio KUBOKI

はじめに

亜高山帯針葉樹林は、気候帯からみると亜寒帯に、垂直的には亜高山帯に極相として成立する森林である。本州の亜高山帯には、オオシラビソ（アオモリトドマツ）、シラビソ（シラベ）、トウヒ、コメツガなどの森林が発達する。東北地方から中部山岳地域ではオオシラビソが優勢で、中部山岳地域から西の地域ではシラビソが優勢になる。亜高山帯は針葉樹林が卓越する植生帯であるが、本州の日本海側地域で亜高山帯に相当する高さを持ちながら、針葉樹林の欠如が知られている。四手井（1952）により偽高山帯とよばれた植生で、ミネカエデ、ナナカマド、ミヤマナラ、チシマザサなどの優占する低木群落が発達する。

ヒメハナカミキリ属 *Pidonia* の分布は森林の植生帯との関係が深く、日本列島における水平的、垂直的な分布はほぼ明らかにされている（窪木、1984 など）。フイリヒメハナカミキリ *Pidonia signata* Matsushita は、白山、飛騨山脈（北アルプス）、戸隠山塊、木曾山脈（中央アルプス）、赤石山脈（南アルプス）、上信越地域の亜高山帯に生息する。日本産ヒメハナカミキリの中でも最も高所に生息す

る種の一つである。筆者は、長野・群馬県境の四阿山の北側尾根の亜高山帯針葉樹林で本種を採集したので報告する。これを機会に、信濃川以東の上信越地域のフイリヒメハナの採集記録をまとめ、中部山岳地域の亜高山帯に生息するフイリヒメハナ、シナノヒメハナ *P. suzukii* Kuboki、タカネヒメハナ *P. tsukamotoi* Mizuno、ワルサワダケヒメハナ *P. warusawadakensis* Ohbayashi の4種の分布形成について考えた。なお、上信越地域とは、信濃川水系以東の山々で、浅間山、本白根山など、現在でも活発に活動している火山地域と越後山脈の山々をいう。

フイリヒメハナカミキリの採集記録

1. 1♂(図1)、群馬県嬬恋村四阿山(標高2,140 m)、24-VII-2005、窪木幹夫採集・所蔵。

成虫は四阿山の北側の亜高山帯針葉樹林の林床のチシマザサの花から採集された。調査した標高2,030～2,150 m 付近の登山道沿いには、ササ以外にヒメハナカミキリ属 *Pidonia* が利用できるような開花植物は見当たらなかった。

上信越地域のフイリヒメハナの採集記録は、新



図1-6. 中部山岳地域の亜高山帯のヒメハナカミキリ類。1、フイリヒメハナカミキリ♀、四阿山産；2、同♀、弥陀ヶ原産；3、同♀、千国揚尾根産；4、ワルサワダケヒメハナ♂、光岳産；5、同♀、同所；6、同♂、経ヶ岳産。

潟県苗場山から♂1個体(山屋, 1989)と長野県根子岳から♂1個体(武智, 1997)の2例が報告されている。今回の記録は3例目の報告記録であろう。根子岳のフイリヒメハナの採集地点と今回のそれとは、四阿山山頂を挟んで3.5 kmしか離れていない。根子岳の採集地点の環境は、南側が火山性の荒原と北側に広がる針葉樹林の境で、そこに咲くヤマブキショウマの花から採集された。苗場山のフイリヒメハナは、上ノ芝(標高1,800 m)付近の亜高山帯針葉樹林のコバイケイソウの花から採集された(中林・山屋, 2001)。上信越地域には、浅間山2,568 m, 四阿山2,354 m, 本白根山2,171 m, 岩菅山2,295 m, 苗場山2,145 m, 日光白根山2,578 mなどの山々がある。針葉樹林の発達程度は、それぞれの山によって異なる。四阿山, 根子岳, 苗場山では、フイリヒメハナは亜高山帯の針葉樹林内やその林縁で採集されている。今後の調査で、他の山々でも発見される可能性はある。

2. 13♂♂, 6♀♀, 新潟県糸魚川市千国揚尾根(標高1,900 m), 3-VIII-2005, 窪木幹夫採集・所蔵。

成虫は登山道沿いの亜高山帯針葉樹林に接するミネカエデ, ミヤマナラなどの低木群落のナナカマドの花から採集された(図3)。

飛騨山脈北部のオオシラビソからなる針葉樹林に生息するフイリヒメハナには、頭部, 胸部の黒色が退色し赤褐色になり、鞘翅斑紋が縮小する個体が見つかる。この傾向は♀に強く現れる。このような現象は、群馬県の草津白根山や野反湖, 福島県の幕川温泉のヨコモンヒメハナ *P. insuturata* でも知られている。両種の共通点は、赤褐色個体がそれぞれの種の分布域の縁の個体群にみつくことである。飛騨山脈の北部では、積雪によりオオシラビソ, コメツガといった針葉樹林の発達が弱く、ダケカンバを中心にミネカエデ, オガラバナの低木群落が比較的明るい環境を作り出している。このような環境のもとで、フイリヒメハナの黒色部の赤褐色化や縮小は、体温上昇を防ぐ生活上の適応と思われる。フイリヒメハナの赤褐色化する個体は、長野県の栂池, 白馬岳一帯, 黒姫山から戸隠山, 岐阜県の左俣谷, 富山県の立山や弥陀ヶ原(図2)での生息が確認されている。

3. 1♂, 長野県辰野町・南箕輪村界経ヶ岳(標高2,100–2,296 m), 23-VII-1995, 鈴木和利採集; 1♀, 同所(標高2,050–2,100 m), 5-VII-1998, 鈴木和利採集; 1♀, 同所(標高2,100 m), 27-VII-2007, 鈴木和利採集。

経ヶ岳は木曾山脈の最北部に位置する。山頂の北側はシラビソの原生林, 南側は広葉樹と混交す

る針葉樹林で、林床はクマザサが生い茂る明るい灌木帯になっている。成虫は山頂南側のナナカマドの花から採集された。

フイリヒメハナの垂直分布

飛騨山脈と妙高・戸隠山塊の森林の垂直分布とフイリヒメハナの採集記録を示した(図7)。日本海側地域で山地帯と亜高山帯の標高が下がるが、亜高山帯は、概ね標高1,600～2,300 mを占め、オオシラビソ, コメツガ, ダケカンバが主要な構成樹種である。フイリヒメハナは、北は黒姫山, 南は御岳の亜高山帯に分布する。飛騨山脈と上信越地域の亜高山帯には、ともにフイリヒメハナが生息するが、上信越地域での採集例が極端に少ない。両地域の違いは亜高山帯の広さと針葉樹林の規模である。すなわち、飛騨山脈の亜高山帯は、厚く連続的で、その上部にハイマツやお花畑からなる高山帯を持つ。一方、上信越地域のそれは、薄く不連続で、その上部にわずかに孤立的な高山帯を持つ。

約2万年前の最終氷期最盛期には、日本列島は寒冷・乾燥の大陸的な気候に支配された。そして、海水面の低下により日本海への対馬海流の流入はなく、日本海側地域でも現在ほど多雪ではなかった。化石花粉の調査により、当時はトウヒ属 *Picea*, モミ属 *Abies*, ゴヨウマツ類 *Pinus* (*Haploxylon*), ツガ属 *Tsuga*, カラマツ属 *Larix* の樹種よりなる亜高山帯針葉樹林が北海道西部から東北, 中部地方にかけて広がっていた(塚田, 1984)。大型遺体の調査からも、その構成樹種はバラモミ, ヒメマツハダの近縁種, カラマツ, コメツガ, シラビソ, トウヒ, ダケカンバ, チョウセンゴヨウである(相馬・辻, 1987)。これらの亜高山帯針葉樹林の構成樹種は、現在のそれとは異なっている。後氷期になると、海水面が上昇し、日本海へ対馬海流が流入し、日本列島は海洋性気候になった。杉田(1990)は、最終氷期から後氷期への移行期(約1万年前)に、氷期の大陸性気候に適応していた亜寒帯針葉樹林が著しい環境変化のために壊滅的に衰退して、その空白域にオオシラビソが分布を拡大したと指摘した。このような亜高山帯林の変遷は、日本海側山地や東北地方の山々で顕著で、太平洋側山地では多雪化の影響は弱く、コメツガ, シラビソ, トウヒが残存した。アロザイム(同位酵素多型)分析による種内の遺伝変異性の地理的勾配の検討は、過去の祖先集団がどこに存在し、気候変動でどのように分布域を変えてきたかその経路の推定を可能にする。オオシラビソ

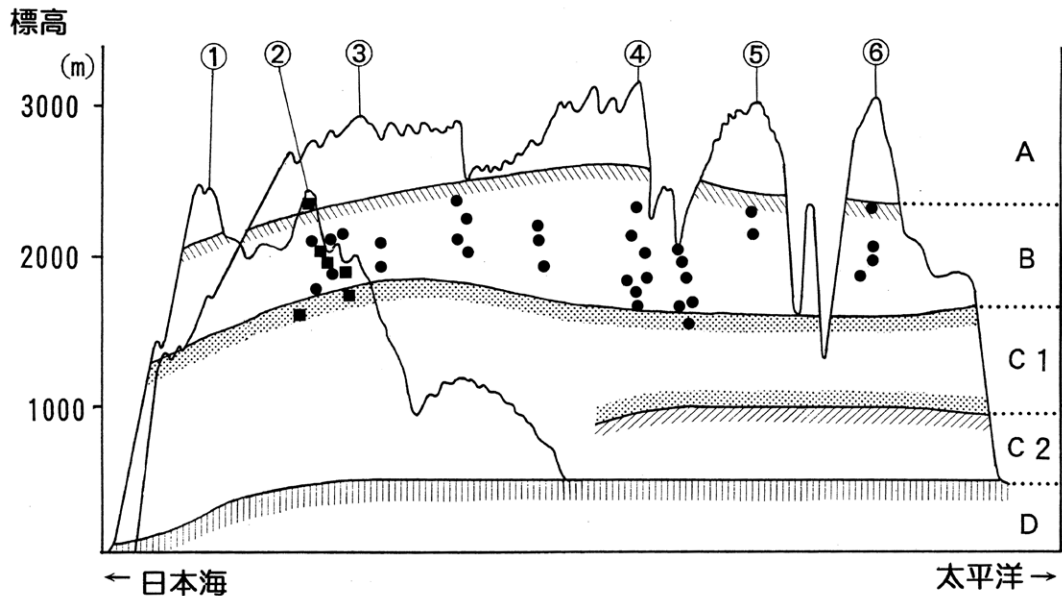


図7. 飛騨山脈と妙高・戸隠山塊の森林とフイリヒメハナカミキリの垂直分布。A, 高山帯；B, 亜高山帯；C, 山地帯（1, ウラジロモミを含む；2, モミを含む）；D, 低地帯。①, 妙高山；②, 高妻山；③, 白馬岳；④, 穂高岳；⑤, 乗鞍岳；⑥, 御岳。

Abies mariesii は、中部山岳地域から東北地方の亜高山帯に分布する。特に東北地方では大きな集団になっている。アロザイム分析の結果、オオシラビソは、最終氷期またはそれ以前に、中部山岳の西域に refugia (退避地) を形成し、気温上昇に伴い、北進し分布を拡大した (Suyama *et al.*, 1997)。東北地方のオオシラビソ林が形成されたのは約 3,000 年前である (守田, 1987)。フイリヒメハナもオオシラビソ林の拡大とともに、飛騨山脈から上信越地域にその生息域を拡大したのであろうか。

フイリヒメハナより低所に垂直分布域を持つシラネヒメハナ *P. obscurior* は、山地帯上部のブナ林を中心に亜高山帯の針葉樹林に生息する。シラネヒメハナは、色彩、鞘翅斑紋に地理的変異が認められ、現在、日光山塊の基亜種 *P. o. obscurior* と石川県白山から記載された亜種 *P. o. hakusana* が知られている。おおむね従来は、尾瀬、三国山脈以西では頭部や前胸が赤く、腿節が黒色の個体が含まれるので亜種ハクサンヒメハナ *hakusana* と扱われてきた。これに対して窪木 (2004) は、♂の末端節腹板、背板の形態や産地間交尾の結果を比較検討し、信濃川水系以東の上信越地域から日光・那須地域と八ヶ岳に分布する基亜種 *P. o. obscurior* と、これより以西の妙高山塊、飛騨山脈、白山地域に分布する亜種 *P. o. hakusana* に分ける考えを提唱した。すなわち、シラネヒメハナ両亜種の明瞭な形

態の違いは、最終氷期より古い時代に形成されたもので、最終氷期の最盛期でも両亜種の遺伝的交流はなかったと思われる。シラネヒメハナより高所に生息するフイリヒメハナも同様に両地域間で最終氷期には遺伝的交流はなかったであろうと思われる。一方、種子が風散布されるオオシラビソでは、平野や河川（たとえば信濃川）は分布拡大の障壁にはならなかったであろう。

東北地方や日本海側山地では、後氷期以降に出現した海洋性気候に伴う多雪気候により、大陸性気候に適応した針葉樹林が消滅して、偽高山帯が拡大し、フイリヒメハナの生息環境が縮小したと考えられる。間氷期や後氷期のヒプシサーマルのような最温暖期に、亜高山帯の下限が上昇し、亜高山帯で生活するヒメハナカミキリ属 *Pidonia* は一部の山岳で生息環境の縮小、消失がおきた。高山帯をほとんど持たない上信越地域では、中部山岳地域に較べてその影響が大きかったであろう。苗場山や四阿山のフイリヒメハナは、氷期とそれに続く後氷期の大陸性気候に適応した針葉樹林の縮小の中で生き延びたレリック個体群である。一方、飛騨山脈北部のフイリヒメハナは、針葉樹林の縮小による明環境に適応し、黒色部の赤褐色化がおきたと思われる。

亜高山帯針葉樹林でのヒメハナカミキリ属 *Pidonia* の生活

中部山岳地域の亜高山帯針葉樹林には、フイリヒメハナ以外に、タカネヒメハナ、シナノヒメハナ、ワルサワダケヒメハナの4種が生息する。しかし、これら亜高山帯種の幼生期の知見は、これまでわずかにタカネヒメハナで報告されているだけである(武智, 1988; Kuboki, 1988)。筆者はその後、シナノヒメハナとタカネヒメハナの下記の羽化事例を確認している。

1♀, シナノヒメハナ(食樹ダケカンバ), 長野県茅野市白駒池(標高2,130 m), 2-VII-1989, 窪木幹夫採集。老熟幼虫を採集, 7月18日羽化(東京)。

4♂♂, 2♀♀, タカネヒメハナ(食樹ダケカンバ); 3♂♂, シナノヒメハナ(食樹トウヒ), 長野県茅野市麦草峠(標高2,150 m), 2-VII-1989, 窪木幹夫採集。老熟幼虫を採集, 7月12日~19日羽化(東京)。

2♂♂, 1♀, シナノヒメハナ(食樹ダケカンバ), 1♂, 1♀, タカネヒメハナ(食樹ダケカンバ), 白駒池(標高2,120 m), 7-VII-2013, 窪木幹夫採集。蛹を採集, 7月11日~19日羽化(東京)。

2011年7月18日, 麦草峠でコメツガのスイーピングによりタカネヒメハナ2♂♂, バイケソウ花上から1♂, さらに, シナノヒメハナをナナカマドの花から5♂♂を採集した。同所同日, 摂食中の中齢幼虫が入っているダケカンバとトウヒの材を持ち帰り保存したところ, 翌年6月18日~25日, ダケカンバからタカネヒメハナ(1♂, 1♀)とシナノヒメハナ(2♂♂)が, トウヒからシナノヒメハナ(5♂♂, 1♀)が羽化した。これらの観察は, 亜高山帯に生息するタカネヒメハナやシナノヒメハナの幼虫が二度の冬を越して羽化することを示している。また, シナノヒメハナがダケカンバとトウヒから羽化したことは, 幼虫の食性が特定の樹種に限定されない可能性があることを暗示している。なお, フイリヒメハナとワルサワダケヒメハナの幼虫の食樹は確認されていない。

亜高山帯針葉樹林とヒメハナカミキリ属4種の水平分布

フイリヒメハナ, シナノヒメハナ, タカネヒメハナ, ワルサワダケヒメハナの4種は, 中部山岳地域にその分布が限定される(図8)。フイリヒメハナは八ヶ岳, 関東山地には採集記録がなく, 上信越地域と戸隠山塊, 飛騨山脈, 木曾山脈, 赤石山脈の高所に分布する。シナノヒメハナとタカネヒメハナは, コメツガ, シラビソ, トウヒといった大陸性気候に適応した針葉樹が残存する中部山

岳地域の中・南部の八ヶ岳, 関東山地, 赤石山脈に生活する。ワルサワダケヒメハナは赤石山脈特産種とされてきたが(図4, 5), 下記の木曾山脈からの記録がある。

42♂♂(図6), 11♀♀, ワルサワダケヒメハナ, 長野県辰野町・南箕輪村界経ヶ岳(標高2,100-2,296 m), 23-VII-1995, 鈴木和利採集。

成虫はナナカマド, ショウマ類の花から採集された。

4種のヒメハナカミキリ属が共に生息するのは赤石山脈北部で, 下記の採集記録がある。

3♂♂, フイリヒメハナ; 8♂♂, 1♀, シナノヒメハナ; 1♂, タカネヒメハナ; 18♂♂, 7♀♀, ワルサワダケヒメハナ, 山梨県芦安村大樺沢(標高2,050-2,240 m), 31-VII-1995, 窪木幹夫採集・所蔵。

フイリヒメハナは, 二俣付近の明るい環境下に咲くナナカマドの花から採集された。シナノヒメハナは, 林内のヤグルマソウやキイチゴ類の花から採集された。タカネヒメハナは, 二俣とお池小屋間の登山道沿いの葉上に静止している個体が採集された。ワルサワダケヒメハナは, 標高2,050 m付近からお池小屋間の明るい登山道沿いのナナカマドや林内のヤグルマソウの花から採集された。ヒメハナカミキリ属4種は, 林縁・林内のような明・暗環境下に咲く植物に訪花していた。ヒメハナカミキリ属4種の生息は, 鳳凰小屋周辺(水野・細田, 2010)や北沢峠から仙丈ヶ岳の藪沢の亜高山帯針葉樹林でも確認されている。

本州の太平洋側地域の八ヶ岳, 関東山地や赤石山脈では, 後氷期の対馬海流の流入による海洋性気候によってもたらされた多雪気候の影響が弱く, 大陸性気候に適応した針葉樹が生き残った。トウヒ属 *Parasol* *Picea* sect. *Picea* の化石球果は, 西日本から北海道南部の広い地域で最終氷期最盛期の堆積物から産出する(相馬・辻, 1987)。晩氷期以降, 針葉樹の分布が縮小し, 現在では *Parasol* *Picea* のイラモミ *P. alcoquiana*, ヤツガタクトウヒ *P. koyamai*, ヒメバラモミ *P. maximowiczii* の水平分布は, 本州中部山岳地域の太平洋側から内陸地域に限定される(野手ほか, 1998)。さらに, これら *Parasol* *Picea* の3種の針葉樹は, 赤石山脈北西部の仙丈ヶ岳と三峰川流域で分布域が重なっていることが指摘されている。後氷期の温暖・多雪化を免れて温存されたこの亜高山帯の針葉樹林にヒメハナカミキリ属4種が生息している事実は, ヒメハナカミキリ属と森林との歴史的に深い関係を裏付けている例と考えられる。

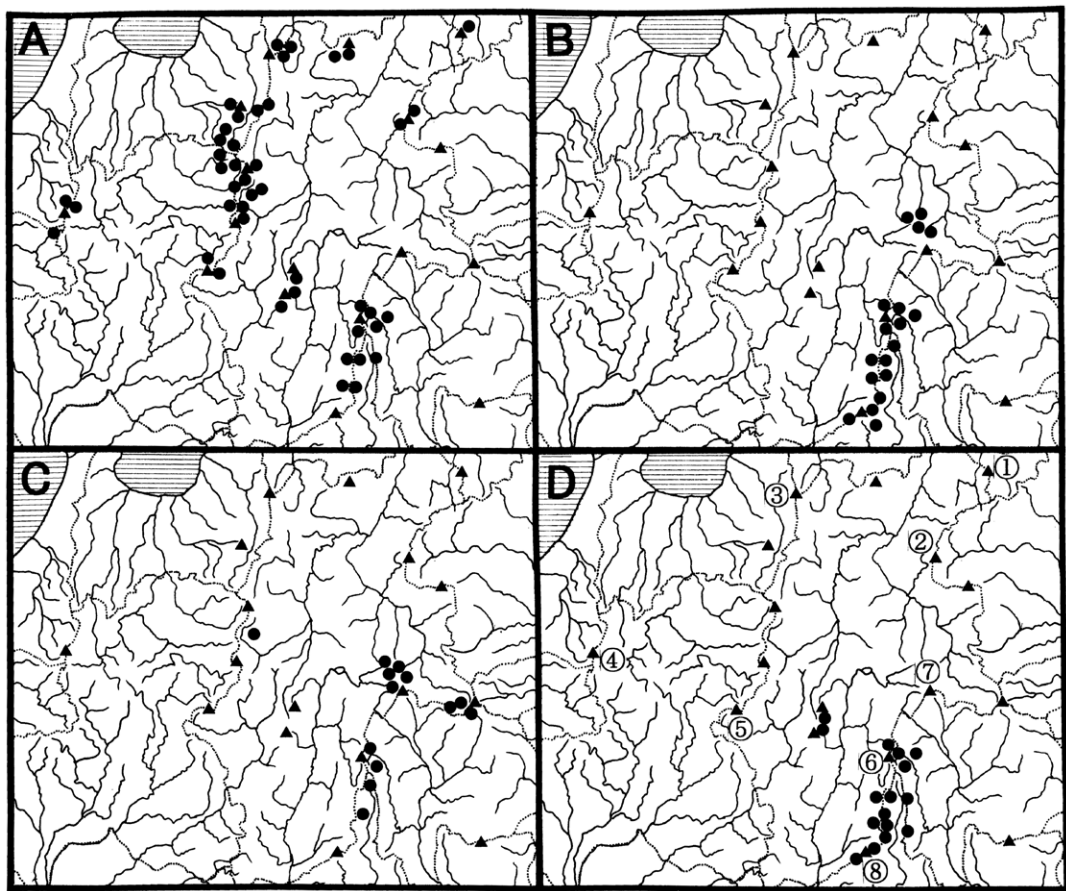


図8. 中部山岳地域の亜高山帯針葉樹林に生息するヒメハナカミキリ属4種の分布図。A, フイリヒメハナカミキリ; B, シナノヒメハナカミキリ; C, タカネヒメハナカミキリ; D, ワルサワダケヒメハナカミキリ。①, 苗場山; ②, 四阿山; ③, 白馬山; ④, 白山; ⑤, 御岳; ⑥, 仙丈ヶ岳; ⑦, 八ヶ岳(赤岳); ⑧, 光岳。

火山地域のヒメハナカミキリ属

那須浅間火山地域、八ヶ岳火山群、富士伊豆火山地域の連なりは、沈み込んだ太平洋プレートの上から湧き上がったマグマが地表に現れて形成された火山前線の内陸側の山々である。このような広範囲な火山活動は、広域な植生の破壊や長期にわたる森林の欠如を引き起こす。森林を生活の場とするヒメハナカミキリ属の生息地の縮小や消失を引き起こしてきた。この火山前線のより内陸側の飛騨山脈でのマグマの地下活動は、立山、焼岳、乗鞍岳のような火山や雲ノ平のような溶岩台地を形成した。これら比較的狭い範囲の火山活動による植生の破壊は、植生の回復の過程で、周辺の非火山地域や噴火の被害を免れた地域からのヒメハナカミキリ属の分布拡大を可能にしたであろう。一方、非火山性の赤石山脈、木曽山脈、関東山地の亜高山帯には安定した森林が維持されてき

た。中でも赤石山脈にはヒメハナカミキリ属4種の分布域が重なっている。

上信越地域でフイリヒメハナカミキリの生息が確認された苗場山と四阿山の火山活動には共通点がある。苗場山は45～25万年前に、四阿山は75～45万年前に活発に火山活動をした歴史がある。一方、浅間山は10万年前から、富士山は8万年前から、男体山は5万年前から活動を開始し、現在でも活動中の火山である(守谷, 2001)。これらの現在でも活動中の火山の亜高山帯にはフイリヒメハナカミキリは確認されていない。

八ヶ岳は夏沢峠を境に、丸くなだらかな山並みの北八ヶ岳と高く険しい岩峰からなる南八ヶ岳に分けられる。この地形の違いは、火山活動の歴史と深い関係がある。八ヶ岳の火山活動は北部から始まった。古蓼科火山は125～115万年前、古麦草火山は115～85万年前、古八柱火山は100～80万年前に活発に活動した歴史がある。一方、南八ヶ

岳では、25 万年前古阿弥陀岳火山の活動が始まり、その後、権現岳や編笠岳が活動した（八ヶ岳図研，1988）。八ヶ岳の亜高山帯にはシナノヒメハナとタカネヒメハナが分布する。

火山には寿命があり、火山活動が活発な山体形成期を経て、やがて山体崩壊期に至る。火山活動の沈静化や停止は、植物が生育できる地形的条件が整えば、安定的な森林植生の発達を可能にする。非火山地域や火山活動による被害を免れた地域からのヒメハナカミキリ属の分布拡大がおきる。八ヶ岳のタカネヒメハナとシナノヒメハナも、苗場山と四阿山のフイリヒメハナもいずれも火山活動の収束、地形の安定した後に形成された針葉樹と広葉樹の混交林に生活が支えられてきたと考えられる。

謝辞

ヒメハナカミキリ属の採集情報を提供して下さった青木小四郎、浦山幸夫、林寛次、平井克男、平山洋人、北村民弥、栗原明雄、日下部良康、三浦康至、中林博之、武智昭一、土田孝、筒井謙、杉本可能の各氏にお礼申し上げる。

2012 年 4 月 29 日、神奈川県藤沢市在住のピドニア研究家の鈴木和利さんが急逝された。鈴木さんは、日本や台湾のピドニア相の解明をライフワークとし、各地で精力的に調査を続けてこられた。コトヒメハナ *P. lyra* の調査は、ヒメハナカミキリ研究の面白さを多くのピドニア愛好者に教えてくれた。さらに、鈴木さんはその健脚をいかして、中部山岳地域の亜高山帯を調査し、そのピドニア相の解明に力を注がれた。その成果がシナノヒメハナの発見につながった。本報告でも木曽山脈や赤石山脈の採集記録を使用させて頂いた。南アルプスの光岳の調査が二人の最後の山行になってしまった。「次は聖岳」という約束は、果たせなくなってしまった。ご冥福をお祈りする。

引用文献

- 窪木幹夫，2004. *Pidonia* 属シラネヒメハナカミキリの覚え書 (3)，ハクサンヒメハナカミキリの分類と分布について。甲虫ニュース，(145)：21-25。
- 窪木幹夫，1984. ヒメハナカミキリ属.，日本産カミキリ大図鑑，pp. 176-200. 講談社，東京。
- Kuboki, M., 1988. Notes on the lepturine genus *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae) from East Asia I. Description of *Pidonia tsukamotoi* Mizuno, 1978, and some notes on its vertical distribution and habits. *Elytra*, Tokyo, 16: 95-101.
- 松田松雄，1984. 日本列島における約二万年前の植生図。日生態会誌，34：203-208。
- 水野弘造・細田倅市，2010. 韮崎市（山梨県）の甲虫。地域甲虫自然史，6号.，205 pp.，日本甲虫学会，大阪。
- 守田益宗，1987. 東北地方における亜高山帯の植生史についてⅢ，八甲田山。日生態会誌，37：107-117。
- 守谷伊智雄，2001. 日本の火山地形。米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高編『日本の地形 1 総説』pp. 180-195. 東京大学出版会，東京。
- 野手啓行・沖津 進・百原 新，1989. 日本のトウヒ属バラモミ節樹木の現在の分布と最終氷期以降の分布変遷。植生史研究，6：3-13。
- 中林博之・山屋茂人，2001. 新潟県のヒメハナカミキリー最近の話題から一。長岡市立科学博物館報，79：1-10。
- 四手井綱英，1952. 奥羽地方の森林帯（予報）。日本林学会関東支部会誌，2：2-8。
- 杉田久志，1990. オオシラビソ林の分布と発達史一針葉樹林帯欠如の成因一。遺伝，44（3）：49-52。
- Suyama, Y., Y. Tsumura & K. Ohba, 1997. A cline of allozymes variation in *Abies mariesii*. *Journal of Plant Research*, 110: 219-226.
- 相馬寛吉・辻誠一郎，1987. 植生。「日本第四紀地図解説」（日本第四紀学会編），pp. 80-86，東京大学出版会，東京。
- 武智昭一，1988. ヒメハナカミキリ類の羽化の記録。月刊むし，(214)：23-24。
- 武智昭一，1997. フイリヒメハナカミキリを三国山脈四阿山で採集。月刊むし，(314)：34。
- 津崎 満，1993. タカネヒメハナカミキリ北アルプスの記録。月刊むし，(263)：36。
- 山屋茂人，1989. 新潟県湯沢町苗場山のカミキリムシ。長岡市立科学博物館研究報告，(24)：35-53。
- 八ヶ岳団体研究グループ，1988. 八ヶ岳山麓の第四系。地団研専報，第 34 号，地学団体研究会，東京。

（2014 年 4 月 4 日受領，2014 年 5 月 24 日受理）



「日本の甲虫」

「日本の甲虫」という名前の本や報告はこれまでに多数あるものの、ある一定年齢以上の甲虫愛好家には、中根猛彦先生（一部は上野俊一先生が担当）が「新昆虫」と「昆虫と自然」の 2 誌に連載していた解説（1952～1990 年、一時中断あり）を思い浮かべる人が多いかも知れない。しかし、

北隆館の原色日本甲虫図鑑や講談社と東海大学出版会のカミキリの図鑑類が発行されてからは、一部の分類群を除きその連載は顧みられることはなくなった。若手の愛好家・研究者にはその存在すら知らない人もいるようだ。確かにこの連載は、今では内容が古かったり、明らかな誤りを含んでいたりもするが、改めて見直してみると、どの分類群についても示唆的な内容が多く含まれ、その中には未解決の問題も含まれたりしている。図も